ジュニアーの国際大会

（アジアユースサッカー
世界ジュニアーアマチュアレスリング）

を終わって

ユースサッカー開会式の皇太子両殿下

牛木素吉郎

（写真・編集部）　一部抜粋

2 世界ジュニア・アマチュアレスリング大会

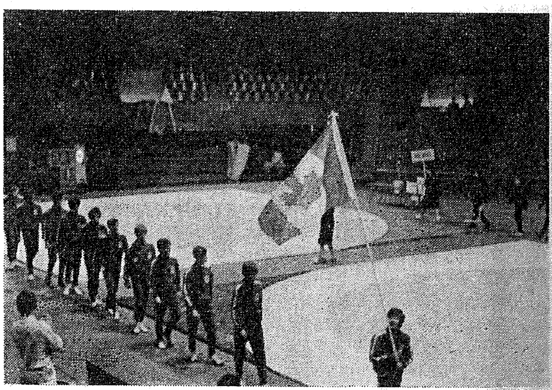
アマチュア・レスリングのジュニア世界選手権大会は、五月一日から六日まで国立競技場の代々木屋内競技場第二体育館で開かれた。

この大会は、今回が第二回で、前回は二年前にアメリカのボルダ市で開かれている。参加選手の年令は16歳～18歳で、日本では高校生の年代にあたる。参加国は前回が九か国、今回が十三か国、百四十九選手であった。

この大会で、まず目をひいたのは、円形のマットが、はじめて競技場に登場したことだった。

従来のレスリングのマットは、一辺が8ｍの正方形だったが、国際レスリング連盟（FILA）の規則改正で、ことしの一月一日から直径9ｍの円形マットを使うことになったものである。

レスリングでは、戦術上のかけひきで、相手を場外に押し出したり、みずから場外にのがれたりすることがある。こういうときに、マットが正方形だと、中心から辺までの距離が不等だから、不都合が生じやすい。「円形の方が、のびのびとやれる」と好評だった。考えてみれば、日本の相撲の土俵はむかしから円形で、こっちの方がずっと進んでいたわけである。



初めて登場の円形マットで開会式

競技はフリースタイルとグレコローマン・スタイルの各10階級がオリンピックと同じ、バッドマーク・システムで行なわれ、ソ連が両階級合わせて、20階級のうち、

10個の金メダルをとり、総合順位ではフリーはブルガリア、グレコはソ連が優勝した。

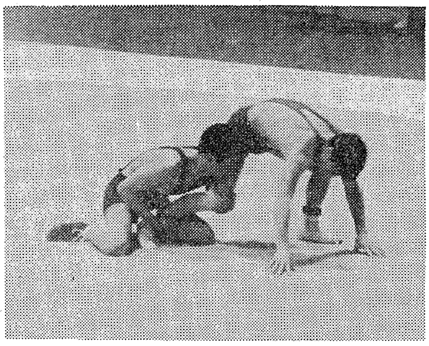
日本はフリースタイルで、48kg級の松橋義行（早稲田大学）と56kg級の大西寿信（八戸工高）の二人が優勝、ほかに両種目合わせて銀メダル2、銅メダル6を獲得、総合順位はフリー5位、グレコ3位だった。

大会前の目標はフリーで金メダル5、グレコで金メダル2ということだったから、目標はかなり下まわったわけだが、サッカーの場合と同じように、日本のヤングたちの試合ぶりはフェアで気持ちがよかったといっていいだろう。

この大会で問題になったことにバッドマーク・システム（罰点法）の解釈の仕方がある。こまかいことは省略するけれども、ちょっとシロートには分かりにくい、この特殊なトーナメント形式が、優勝争いの段階になると、クロートにも、なかなか意見の一致しない問題をひき起こした。

しかも、奇妙なことに、その問題を担当している国際レスリング連盟の役員が、自国の選手が有利になるような解釈に固執している（ように思われる）のだから、ちょっと、こういう国際試合運営の感覚は、われわれには、理解しにくい。

フリースタイル60kg級の場合には、五回戦で不戦勝になるはずの選手を間違え、さらに順位決定ではモンゴルの選手が三位になるはずのところを、ブルガリアの選手を三位にして表彰してしまった。



優勝した松橋選手の猛攻（一回戦）

モンゴルの選手が三位だということは、その当日に日本の新聞記者が、役員の計算違いを指摘して追求したのだが、役員の方は、ガンとして受け付けない。表彰台にはブルガリアの選手があがって銅メダルを受け、日本の新聞は、モンゴルの選手を三位として扱うという奇妙なことになった。

三日後に、モンゴルの抗議をいれて、正式にモンゴルの選手を三位にし、ブルガリア選手に与えた銅メダルも「年少者の大会だから」ということで返還は求めないことになったが、そのときの国際連盟の役員のいいぐさがふるっている。

「日本の新聞記者の正義感に負けた」というのだがこのへんの感覚が理解しがたいところである